

昭和47年度

文連本部

活動報告

文連総括(その一)

(1) 文連執行部としての任務完了に際し、約一年有半にわたる活動の報告とその過程の回顧を整理してあさたのである。我々の報告を成立した時点で、才一に問題としておこされたのは、我々が如何なる歴史性から規定された執行部として在り得たか、若し換るならば、どのような情勢的課題を背負ったのかとして我々が立ち上つて行つたのである。即ち、昨年、明大の争い敗北にともなう文連執行部の崩壊の時を思ふべき、それは政治的レバレッジは幾らであったか、いかに根底的な「サークル」といふ仲間からの抱き返しが必要であった。サークル運動を政治運動の同伴者としておぼろげにあり、互にやりか、サークルの「誘惑」を「誘惑」として、政治的有無ははじめから論外としても、決して目に見えない表面的な「誘惑」を以てなく、あくまでサークルのかかえ得る文化、思想レベルにおいておぼろげなものである。その意味で我々の運動展開の才一歩は、それまでのサークル運動の歴史を再検討することであった。

(2) それに引けた作業としての契機として、我々は昨年におけるサークル運動を同業者同僚の総括から成して行つた。それは既に、昨年の同文連臨時総会の冒頭報告の中で若干ながら明らかにして来たわけであるが、ここではその不十分を補いつつ述べておきたい。我々は、才一には、サークル運動とそれの研究対象との関係性の問題を以て、それまで、才一の問題として、才一の問題に属して言うならば、我々が日々、場面に存在し、活動して行つた「サークル」に何らものを我々の最も根底的な基礎である「学生」の存在をどう認識するかを再度把ち直さざるを得ないであろう。それは主宰にはハクラスレー、サークルという回路を追求することによってサークルを動かさざるべきである。校正以降のサークルの大学全体の中での位置を明確にする必要があった。そして、その前提として、現在のサークル運動の方向性そのものの解明を以て、逆に「サークル」ハクラスレーという回路を追求することである。一年余りに渡る教育研究を中心とするその実践的行動は、大学教育（公教育）の秩序が唯一、前記認定によって支えられ、全ての準備はそこに集約されていくべきである。そして、サークルはその教育体系の中に組み込まれたものであることを明らかにした。しかしながら、このように大学におけるサークルの存在を追求し、そのことには必ずしも、学生と人々が何れも研究対象の近代化「サークル」といふ其間性の中に求むべく意味、すなわち、右記的には、個人としての創造活動に重んじられべきであり、サークル運動として獲得してはならないものがある。このことは同時に、我々のサークルにおいて、どのような仲間との関係性を築き得るのか、という意味においても極めて重要な課題として残されていくであろう。

才一実行の問題は、個々人の人間性の中でその研究対象への関わりがどの程度に重なり合つて行つたか、という点に要約されるであろう。政治課題に乗り掛かることによつて何となくさういふ幻想の時代は既に過ぎ去り、その歴史に於いては何れも論議し尽くされてきた。今、我々は客観的にその歴史を振り返り、その歴史に於いては何れも論議し尽くされていくべき方法が有り得るか、もし、その歴史に依りてはならないであろう。

(3) 簡単にいへば以上の事を前提として我々は次に文連本部としての活動をどのようにに担いでいくべきかを問題としてきた。即ち年度風向執行部が文連本部は、事務機能の回復ということを主眼におこすつも、幾つかの重要な問題を提起してきたと考へる。すなわち、文連本部の使命不明の歴史を整理して、文連の政治的引ききれしというものが、サークルの創造活動に於いて、どのような結果をもたらすのか、更に、それをどうして実現して、いかに自分自身

組織として文連本部は如何なる意味をもち得るかという点であつた。國同歩行部はそれ
に對する解答を出しよす手続をてしまつたわけである。我々が如何に同歩を推進しよう
としたかをも明確な結論を述べることは出来なかつた。ただその余韻として推測出来る事
があることは、文化、あるいは文化創造なるもの権りに對する本質的な在り方の問題で
はなりのことであらう。つまり、文化の政治的帰趨、あるいは、パウルリ切手で表現す
るならば「赤色サークル論」第2の展開として文連部を提議するならば、本来以上の
問題は解明化されるであらう。すなわち、文化、あるいは文化創造というものは、本来以上の
ような権力に對しても、自由でなければならないから、もしそうでないならば、
努めつて生命を失つたものにすぎないのではないか、という強固な主張があるがそれだけの
力に對する認識の内容である。その代價、文連といふ我々が何をもち得るかといふ事は
何であらうか。一方では文連本部は大體の公認組織として、公認の権力をもち、彼ら自身が
義務制へ参加してきた。即ち、文化に對して、文連に於けるサークルを以てこの中心として
きた様に、文連本部、サークルという構造の中に在り、とりわけ、サークルに對し
ては公認の権力を握るとしてこの中心に上級組織として立つたのであつた。我々は、この観点で
文連部の権力を分析したところ、如何にしてこれを実現出来る運動を設定して行くかを課
題であつた。確實に我々の文連本部として自発的側面を持ち得る限りにおいて、その最も本質
的の存在の仕方、運動形態としてある。しかしながら、他方運動の共同性といふ意味での
文連が存在を主張しようとする。但たサークルが創造運動を必然的に持たざるを得ない一歩の
幅延びという事を、逆に、文連を創造して行くべきの支えとして提議するべきではない
か。もし文連本部というものを運動形態として取り得るならば、それ以上に運動を
手出し、おぼろしく、文化文連というべきである。我々の我々の共同性の問題をも含めた形で、
彼らの創造者の提議出来ることにならう。

(5) 以上を以て西から見た文連本部、我々の我々の運動の運動である。文連部の中心
として過言ではない。しかしながら、それが情達が我々に在るものであるならば、やはり我
々はそれを受け受けるを得ない、現存的に文連本部として詳細にわたるべき運動を一試する
ことはほとんど困難であるが、それらの問題は今後一生々々どう困難であることには
違ひである。以下、我々の具體的運動形態について簡單に述べた。

この一年間、我々が最も中心的に取り組んで来たのは、今年の一月、即ち公認運動に
強行を自認する立場によつて閉鎖された大衆運動であつた。(労働問題の詳細は別紙参照)
的では強固のロックアウトは強固的にサークル活動の場を奪ひ、サークル絶たれたりと互殺
をぬかうものであつた。しかしながら、主催の問題として、その時々の状況をサークル活動と
出来ず、今後化してしまつた。その結果、文化の問題を以て片付けられ、より根柢的
な問題を食んで来た。すなわち、我々の運動が「場」に依りたものであり、限定的
のある一面的なものである。本質的にはサークル運動と文連部との間に、限定的
的の場を獲得して来たか否か、とは向つてはなかつた。その結果、文連部の運動は、
その場面的な特色は無く、思想的な特色は無く、実践に於ける運動として復讐されてきた。我
々の中心に對つては、其の特色は、あるいは、その特色は、その特色は、その特色は、
獲得して行くべきである。その特色は、その特色は、その特色は、その特色は、
分かつて来た。その特色は、その特色は、その特色は、その特色は、

次に我々が行なうべきことは、その特色は、その特色は、その特色は、その特色は、
うに、出来る限り強固に在り、サークルの中心を持つべき運動を推進する。その特色は、
せ、その特色は、その特色は、その特色は、その特色は、その特色は、
公認組織を以て中心にするべきである。その特色は、その特色は、その特色は、
は我々の中心の問題として、その特色は、その特色は、その特色は、その特色は、
かえて行くべきである。その特色は、その特色は、その特色は、その特色は、
その特色は、その特色は、その特色は、その特色は、その特色は、その特色は、

大学祭を積極的に行うという意見もあつたのだが、やはり白けた気分では、そんな事
も出来ないで、今回のよう反形になつた。そして、結果的に、なほり八丁庄ものになつて
し手、たし、マスコミにも載つていくという形で、半分、脚色団体たいていになつてしまつた。
しかし、その中で、シンポジウムだけは、さやか反形ではあつたが企画し、行つた。
毎年の例にもれず、今回も尾道、広島で祭であつた。文運としては、具体的に、敬愛堂に執
行部のメンバーを送り込め、資金援助をすること祭台案に成つて、た。
このように、具体的に、和泉文庫のリーカン、新入生歓迎会、和泉家の深夜映画、歌
台案といつものに成つた。この他にも、訂正風とか、村岡紙の発行など、やつて外に
かつたものもある。当初の意図とは裏腹に、現実的に、我々も考える文化的内容で、具
体的なものとして、ほこんと表現できなかつた。たことは、自己批判的に反省されるべきであらう。
我々は文化というものを考えてきただけであつた。その答は、たやすく出るものではない。

★学生自治会館に就いて

69年の10、9月動議案で、それに引き続く全学ロックアウト以来、大学当局は、校舎再
建という形をもつておしよりの「正統化」攻撃をなしてきた。そして、学飲の封鎖、時
間ロックアウトによる校舎当局的「カ」の収録路線を進む中で70年71年の学飲解放斗争女
めなれてきた。

明大における学飲には、そもそも、その発端ならして大衆的暴力、個別サークルの力を背
景としたものではなく、42年の学生斗争によるこの副産物、妥協物としての「話し合い」
にやむを得ざる「獲得物」であつた。そのため、大学当局の言うところの「学生職員のための
の厚生施設である」という理論のめり込めをしまし、学飲の位置づけが不明瞭になつてし
まつたのである。それはつまりこのころ、マスコミ化した大学における学生の内外感を拡大し
つておの現状において、学生大衆化、学飲という、自主研究、活動の場を、与えるとい
う形に、学生の内外感を面的に解決し、もつて、大学の学生に対する管理支配の手段とし
て存在し、作られたのであつた。それ故、初陣にありには単にサークルと生協な位置づけを
とじておくらせられなくなつてしまつた。

田年の明大斗争において、全共斗の結成過程の中で、サークルの中なら数々の斗争委員会
女生まれてきた。しかしその理論も単に、現状のサークル存在し二の境、サロンとしての
サークルに反対するマンチとしての論理を展開し、それは「社会総体への緊密な関係」をサ
ークルの中に持ち込め、きわめて政治主義的サークル論をもつてMを行つていった。
サークルに直接、政治を持ち込め、サークルを復権するといふ理論は赤色サークル論は、
結局のところ、サークル内の研究課題であり、文化という問題は、とらえ切れず、脱落し
てしまつたのである。

70年71年6月、10月に当局の再三にわたるロックアウト策動にも及なわらず、多くの学
生、サークル員によって、連続的に学飲解放斗争女闘いぬられたが、しかし、それ以後、学
飲運営委員会の破壊という、我々自身の内部的弱さなら、学飲を物理的に解放したのみであ
るいは「物取り」的部署の使用のみに止まつてしまつた。例えば、8月学飲などは、各サ
ークルは自主管理中とは言いつつも、そのサークルの使用している数平方メートルの部室た
けを占拠していれば、それでそのサークルは、自主管理を行つているのであつた。

自主管理の「自主」とは、他サークルに部室を取られないようにするため付けた名前であ
らうな。自主に付けたならには、今まで大学当局によって封鎖され、管理支配されてきた場
合は我々も、サークルが自主して管理するといふことである。しかし、ただ、この
ような状態を維持せられたことであつたと言つても良いと思つた。それは、初期の段階として、8月
学飲新学飲のとりこを初陣として、各階に連絡会製な結成され、サークル活動の内閣性、自

主管理の内情性な討論され、恒常的に公認が設けられるようになったりである。以前において、ほとんど自主的にサークルが集まって討論を恒常的に行なうことは、あまりなかったことと想う。

その一つの中心、昨年、7月中旬における文連対学生部との団交においてなされた

尊厳ある、学生会の條理の協議を、このようにとりあげるのなという課題のもとで、全学的な連絡会議もたれるようになった。

この会議において主要な討論されたことは、この公認をどのような性格とするかという問題である。

我々文連は學敵陣放後、すなわち新學敵に本部を設けたわけであるが、すなわち全体的な連絡会議を設けることなまななしたことは、文連のみならず、學敵の中に入った全てのサークル、団体の主体的不十分性であった。初期において、工學同盟などのように、各サークルがこらえるかと言った内容の討論であった。たゞ、その中で、工事、學敵修理は、我々の側で取り取っていくものである。そしてこの條理を我々の自主管理に割りしないう限り、認めることにはできる。しかし、我々の手で、できる修理は我々自身の手で行っていくべきである。そして又總務委員会の結成の問題、それに基づき、大尊当局に対する団交の結成をも目標とした組織を作るべきであるとする見解が述べられた。しかし一方において、形式的な連絡委員会を結成して、単格的に大尊当局との対決というパターンをとるのではなく、今までもなされて来た學敵解放斗争と、それに引き続く自主管理の内史と統括、そして前期の學敵連署委員会は何かつづいてしまったのかという問題を各サークル、団体が出し合い、それを批判、討論する場が、この學敵連署総会であり、こういった討論をふまえない限り、この場合、連署委員の結成を決議しても、それは単に形式的に結成しただけであり、旧態依然として、サークルに対しては何の關係もない、連署委員あり、又自己崩壊してしまふという形をとりやめざるを得ないであろう。であるが故に、単に修理を修理問題として、とりあげるのではなく、連署委員会の結成、修理工事の獲得を目標としつつも、各サークルからのサークル論、あるいは學敵解放斗争の総括討論の場がこの公認である。

サークル運動と學生公敵について

學敵

とサークルの関係を述べる場合、現実の大尊の中におけるサークルの存在基礎を明確化させねばならぬであろう。それは現実のサークルの存在を、高目的に前提として、その上に「人間形成の場」「學問研究の場」等の意味をサークルに付与しても、それはつぎの通り、大尊の内外からの進出の場、「厚生福祉の場」に集約されてしまふであろう。過去においてこの現実を脱皮するため、幾々のサークル論がたたき出されてきた。一方においては、サークルを、運動体と規定し、赤色サークル論を取り、赤色學敵論へと切り込んでいき、サークルは活動家學生の「マール」のことな、意識を具へ出せなくなっている。我々は、面的にサークルへ政治を付与し、語らざるにサークル運動の承認しなはならない。我々は歴史の學問体系を、自己存在の内から批判し、みずからの社会的必然性に基いてこの自己の問題に接近しないう限り、ただの「遊び」ことこのサークル運動に著してしまふであろう。學生公敵も、同様「政治課題の施行性の中に見出し出すのではなく、自己のサークルの研究課題」をわづらうていく困難な理論的対象の中に見出し出して行なわねばならぬであろう。

現在、尊厳維持、入試強行を前にして、大尊当局は、根本的に尊内問題を決する公口

しつつも、學生、先輩対策のみを行ない、又もとの學敵十名學敵新學敵を候補、ユングリーターを封鎖した。我々文連は、このような事を認めることはできない。我々は學敵連署総会での積極的強化を通じて、大尊当局の攻撃をばねとして行く力を構築しなければならぬと想います。

文連総括 (その四)

サークル運動の昏迷と煽惑という陳腐な言葉が、全共斗運動の退潮とともに盛んにもちいられた頃があったが、それは大部分が「運動」という名の肉体的行為にのみ重点が置かれたものにすぎなかった。サークルの存在の意義を考察することなしに、やたら煽惑のいいカケ声ばかりを掛けて悪気ないでいた運動に「文化」の向殻が頭にあつたと思えない。かえらば文化と言えは直ぐ運動と執着にして考へる奇特な習性をもつていて、しかも力点は必ずと言ってよいほど後の運動に付くのである。この運動というのが曲者の食わせもので、自己の利害と直結して、有利な方とならなければ意味のないものとされる。その場その場で都合に合わせて「文化」をかっはり出し、一見理論を示しているように見せながら、その利用主義は変ることがないという杜撰になつてゐる。サークル運動の昏迷と煽惑を指摘して、動け動けとアジるのは困りても、文化の領域を担うサークルとしての具体的な困難が論じられ、示されるといった場面には、ついぞ目にかかつたことがない。寧ろ不毛な論争であつたと云えるだろう。最近ではさすがに、時代がくれと想うように存つたのだから、誰も言い出さなく存つてしまつたが、その姿勢はなれにまたざるそのそのの感言が流行することになろう。悪い風邪には鼻をつけた方がよろしい。静かにはなつたけれど、それで尚懸がかつたわけではなく、真の意味でのサークルの運動、文化の運動とは何かという問は残されてゐるのである。この場合、これではならないのは、文化を運動として現出させるということが目的ではなく、文化そのものをほくらが考へて行くということが大切なことなのである。文化そのものは決して運動などしない。運動するのは人間の肉体的みである。容易に考えからの文化運動など所詮、紙上の居るもので、どういふものは直ぐに消え去るものでしかない。政治と文化という設題を用ひてかからなければ、とんちへ本道に入りこんで、それがオシマイということになる。それがもはや、狂生際の愚い奴ら、ホ化けとなつて出まざる生儀になる。設定したいもあまり上策ではない。むしろ「歴史と文化」というくらいのが、ぬりぬりなるような設題の方が教段出来が良い。数百年数千年の単位でものを考へるやうになれば、少々のことでは驚かなくなる。ほくら腰も座らうと言ふものだ。なまじ政治という身近かへかどうか知らないうちにもものをちよいじかじつただけで政治を論ずるならまだしも、政治と文化を掲げて文化を論じられたのではたまつたものではない。どういふ、たまたまほど大きな旗を立てたが、小物が大物まじりでいきから始末が悪い。相きにしないうちが判口である。「歴史と文化」という設題の方が生産的と言へるだろう。このやうな大穴な本根の原野こそがほくらには希なものである。その原野をすこしづつ切り開いて行くしか術はない。それは自身の「思想」というものの形成に不可欠なものと云へるだろう。こう書くと、「のん気なことを言つた。思想の形成は今こそ急務なのだ」と言つた人、いさかもしれない。その運。急務であることは誰が疑ふまい。しかし、横になつて考へることと寝ていることは違つ。如走つた自にはさう踏るべしと云はないが、着実にその任務をこなしている人たちは確かにいるのである。地味ではあるが、もしこの世の中が変ることがあるとするならば、これらの人たちの力によるものが大きいであらう。「革命こそ急務だ」と言つたやうな人がいるならば、その人には歴史の転換期に殺される行つた無名の人々の墓も敬えて頭を冷やすことをほくらにはすすめる。日共自身も諸君のやうに国会へ代議士を送りこめば、それ世の中が変ることも思つてゐるやうな危険な図式主義、樂觀的で無知な頭腦は、はじめからこの厳しい思想のたかいたを放棄してゐる。革命が起るか起らないか論じることとは恥ずべきことであるべきである。思想の形成こそが何よりも希なものである。どこのまで行けるかは向うまい。培えられるものでもない。ほくら文化サークルに「仕業」というものがあるならば、それは根源的に日本の思想というものを考へて行くといふ

ことあり、その思想を表現するやたかな言葉を生み出すということである。それ以外にはない。その言葉は契約には国家立法の制度としての言語の無体を指すものとしてあるはずである。そのとき相互の批判は絶対には必要である。しかしながら、ほくら文化サークル諸団体は、いまだにその責を獲得できようような状態にはいない。ほくら文連執行部の不充分さもあつたであらう。今後の課題として受けつたれ行くものでなければならぬ。

現在、ほくらのまわりの状況はますます悪いものに折りつつある。大塚當局は欄を高くたはりめぐらし、学生を管理支配することにその教養の全情熱を注いでいる。しかし、録の才りによつて人間の精神が眠らされしまつたのではないことは歴史が証明してゐる。真に文化が必要なのは、人々の精神が眠らされようとするときなのである。やがて反響は起こるであらう。そのときほくら文化サークル諸団体は、自らの言葉を、もつていなければならぬ。借りものはすぐに錆びつき、使いものにならぬ。

「歴史はくり返す」この言葉には「但し、歴史を知らぬ者たちの手によつて」という但し書きが必要であるらしい。不毛なくり返しをくり返さないために死人たちの果たした役割と「愚行」を知ることは無意味なことではあるまい。老婆心はがらひと言。

総会決議の採択に関して

7年10月に斗い抜かれた学敵解放斗争によって我々は7年10月以降大学当局によってロックアウトされていた新旧両学敵の実力解放を勝ち取った。それ以降、多くの諸サークル、諸団体により「自主管理」が進められ、当局の「立ち入り禁止」をほねのけ、我々も又、学敵占拠を行なってきた。そして、自分達の空間占拠の貫徹とその徹底化を計ることも、後体としての学敵運動の展開を目ざし、新学敵連絡会議を結成した。新学敵連絡会議を通じて我々は多くの諸団体との交流を求め、手を取り合った。我々としては、我々の獲得すべき空間としての学敵を追求し始め、我々は、学敵を媒介として相互の立場性の相違と、現実的「立ち入り禁止」という状況にあつて、学敵自主管理を貫徹するという同一性の両面を承認する中から、相互の運動の突撃を新学敵連絡会議で行ない、相互の運動の促進を、空間としての学敵とその運動を持つて勝ちこられるであろう全面学敵「解放」学敵運動を本質して行く、その一過程であつた。目的意識的に学敵の獲得を追求する中から、物理的諸問題を解決するために、昨年7月に学敵部員同交を行なつた。その結果、電気・ガス・水道の工事を一時は勝ち取つた。しかし、その事により、また他の団体との連絡不足や我々の準備の不足などが一時的に現われ、緊急に全学学敵連絡会議を開き、工事問題を討議し、除々に新学敵連絡会議の性質と同じような内容を獲得し始めた。そして、戦々然と資料として、電気をいれる事に成功した。

そのように、我々が着々と自主管理の強化を行なっているにもかかわらず、大学当局は突如として一月十九日以降、新旧両学敵及び四号館をロックアウトし、コンクリートづけにしたのである。これは、この間の学敵斗争の展開によりおこつた当局は学生の活動拠点の破壊を目的にしたものである。二のような当局の一方的な「破壊的行為」を我々は許すことが出来ない。そのため抗議の手段として我々は以下の決議を勝ちこる事が肝要だと考える。

決議文(案)

「大学当局は我々の活動空間であり、かつ交流の場である四号館・新旧両学館を奪い取る一切の行為を即時中止し、ロックアウトを解除せよ」

文化評連合会

MEMO

33
020
35
董反保委

昭和48年2月17日



文化部連合会本部

会計報告書

会計部長

※なお支出科目は、847.3.31付学生会中報会計部長の通達にもとづき作成したものである。

科目	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	総計
収入の部	繰越金	729,047										729,047
	学生会費						993,000			270,000		1,263,000
	大学助成金						100,000					100,000
	臨時部会費				18,750							18,750
	売上金			115,000								115,000
	貸出金返済	150,000		150,000					30,000			
小計	879,047	0	265,000	18,750	0	1093,000	30,000	0	270,000	0	2,555,797	
支出の部	庶務費	25,250	10,795	15,425	7,380	3,455	5,935	90,845	21,535	1,360	17,330	199,310
	渉外	198,160	50,590	179,510	34,630	4,030	3,880	251,620	167,870	9,000	11,500	910,790
	情宣	8,430	12,680	26,150	440	0	5,100	6,295	7,685	3,660	2,740	73,180
	厚生	0	50,000	30,000	0	0	0	0	1,975	0	0	81,975
	調査	902	2,486	772	0	0	0	390	835	0	1,380	6,765
	文教	3,625	640	1,450	0	470	1,200	3,520	4,010	1,525	1,760	18,200
	会議	0	0	0	1,800	0	0	2,580	8,683	0	1,630	14,693
	講演会	28,000	96,500	31,350	0	0	0	0	0	0	3,000	158,850
	連盟	0	0	10,000	0	0	0	0	0	0	0	10,000
	合宿	0	0	0	1,000	0	141,450	0	34,400	0	0	176,850
	交通	0	0	0	24,000	0	0	0	35,090	0	0	59,090
	食費	0	3,000	410	0	0	0	0	5,600	0	400	9,410
	電話	0	0	0	0	0	0	30,000	0	0	0	30,000
小計	264,367	226,691	295,067	69,250	7,955	187,565	355,250	287,683	15,545	39,740	1,749,113	
毎月差引残高	614,680	387,989	357,922	307,422	299,467	1,204,902	879,652	591,969	846,424	806,684	806,684	